新宿区を対象とした景観調査および景観まちづくり計画・ガイドブック策定の取り組み

PRODUCTION OF COMMUNITY LANDSCAPE PLAN AND GUIDEBOOKS IN SHINJUKU WARD THROUGH RESEARCH IN LANDSCAPE

渡辺勇太 — * 1 後藤春彦 — * 2
佐藤宏亮 — * 3 北川博邦 — * 1
木村美樹雄 — * 1 高村 亮 — * 1

Yuta WATANABE — * 1 Haruhiko GOTO — * 2
Hirosuke SATO — * 3 Hirokuni KITAGAWA — * 1
Mikio KIMURA — * 1 Ryo TAKAMURA — * 1

キーワード：
景観まちづくり, 景観単位, 既成市街地, 景観計画, 新宿区

Keywords:
Community landscape planning, Landscape unit, Urbanized area, Landscape plan, Shinjuku ward

The following paper deals with the method of research in landscape, through the production of Community Landscape Plan and Guidebooks in Shinjuku ward. This is aimed to develop or control the urbanized area, to suit the character of each landscape unit, and to encourage grass-roots movements.

The overall workflow :

- 1) Grasp the features in landscape
- 2) Abstract the landscape units
- 3) Determine the border of each area
- 4) Establish the guidelines for each area
- 5) Produce the guidebooks

1 はじめに

1-1 背景と目的

景観法の施行を受け、各地で景観まちづくりの機運が高まりを見せている¹⁾。だが、歴史的市街地や景勝地等に比して、住宅地等を含む一般的な既成市街地では、景観まちづくりの方向性をイメージすることが概して難しく、そうした地域を対象とした計画技術の確立・向上が全国的な課題である。特に、計画範囲を指定し具体的な取り決めを行う際には、その拠り所となる景観単位の抽出や編纂に向けた手法を確立することが求められる。

新宿区では、当研究室と東京大学都市デザイン研究室、工学院大学窪田研究室（当時）の三研究室の協働（「新宿区景観まちづくりワーキンググループ」）により、『新宿区景観まちづくり計画（素案）』エリア別景観形成ガイドライン（以下、エリア別ガイドライン）および『新宿区景観まちづくりガイドブック』（以下、ガイドブック）を策定した²⁾。ここでの基本的な考え方は、街を歩く人や生活者等の視点に立ち、既成市街地において醸成された細やかな景観単位を抽出し得ることを前提とし、それぞれの景観特性に応じて景観資源の保全や修景計画等の景観まちづくりを官民一体となつて行おうとするものである。

表 1. 言葉の定義

景観単位	地域固有の景観を成り立たせる土地条件・歴史条件・社会条件を共有する空間的まとまり。
地区	景観まちづくり計画の運用を前提に、新宿区における各特別出張所の管轄区を基準として区分された10の地区単位。
エリア	各地区内における最小景観単位。景観まちづくりを実践する上での基準範囲として、新宿区では全72のエリアが設定された。

図 1. 本計画における新宿区の10地区の区分と各大学の担当

本計画の策定にあたっては、ワーキンググループ内で相互に連携・調整を図りつつも、各大学それぞれの考え方やアプローチの方法が尊重されて行われた。当研究室では、早稲田大学の立地する周辺地域である若松・大久保・戸塚の3地区を担当した（図1）。

本稿は、早稲田大学後藤研究室における景観へのアプローチ

行政による規制や誘導（コントロール）

明確なエリア区分
～行政計画の運用上の利便性
【新宿区景観まちづくり計画】

【新宿区景観まちづくりガイドブック】

景観単位
～成り立ち・文脈等の理解

市民による自発的な取り組み（マネジメント）

図 2. 本計画の概念図

*1 早稲田大学大学院創造理工学研究科建築学専攻 修士課程
(〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1, 55N0709A)

*2 早稲田大学理工学術院 教授・博士(工学)

*3 早稲田大学理工学術院 助手・工修

*1 Graduate Student, Dept. of Architecture, Graduate School of Creative Sci. and Eng., Waseda University

*2 Prof., Faculty of Sci. and Eng., Waseda University, Ph. D.

*3 Research Assoc., Faculty of Sci. and Eng., Waseda University, M. Eng.

図3. 本事業における当研究室の取り組み全体のフロー

の報告である。本稿で用いる言葉の定義を表1に示す。

基本的な視点として、行政による開発計画のコントロールと同時に、住民や事業者等による自発的な取り組みのマネジメントの双方を相互補完的に行っていくことが重要であると考えた(図2)。

本事業における当研究室の取り組み全体のフロー図3に示す。2章では「景観基礎調査」における1) 景観特性の把握、2) 景観単位の抽出、3章ではエリア別ガイドラインにおける3) エリア設定、4) エリア別ガイドラインの策定、4章ではガイドブックにおける5) 景観ガイドブックの編纂、について、それぞれの取り組みの手法と考え方を示す。

1-2 対象地の概要

東京西部の山手地域は、洪積台地と沖積低地が入り組む複雑な地勢を有している。江戸期の土地利用はその地勢を基になされ、今日における街区構成の基盤を成している。新宿区は、淀橋台地と神田川水系をはじめとする谷筋により起伏の変化に富んでいる。また、江戸朱引きを継承して設定された東京旧15区境界によって、新宿区はその歴史的背景の違いにより2分される。江戸期以来の既成市街地(旧15区内)と、明治後期以降に急速に市街化されたかつての農村部(旧15区外)の双方が含まれている(図4)。

当研究室の担当した若松・大久保・戸塚地区は、それぞれ特徴的な地勢を有している。例えば、戸塚地区は神田川に近接し全域に渡って斜面地が形成されている一方、大久保地区の南西部では淀橋台地上の広大な平地が広がっている。また、3地区とも旧15区境界に接している点が特筆される。江戸の周縁部における土地利用として、大規模な武家屋敷の跡地や、街道沿いに発展した両側町等、各地の成り立ちは独特であり、景観は概して多様性に富んでいる。

図4. 新宿区の地形と旧15区内外の区分

2 「景観基礎調査」における景観単位の抽出

本調査は、学生9名が2006年12月から2007年3月にかけてフィールド調査を中心に実施された。調査結果は、『新宿区景観まちづくり計画基礎調査』という基礎資料として、2007年4月に地区別にまとめられた。

2-1 景観特性の把握

(1) 基本的な考え方

各地の景観は、固有の土地条件や人工物による物理的特性のみならず、人々の生活行為の時間的蓄積の結果として現れる視覚的表象の総体として特徴付けられるものであるという見地に立つ。各種資料・文献調査により、広域的視点や史的観点から基本的な街の成り立ちを把握した。また、様々な景観の見方があることを前提に、各種調査テーマを設け詳細なフィールド調査を行い、そこでの発見には特に重点を置いた。

(2) 地区全体の景観特性の整理

景観を成り立たせる基礎的な要素として、3地区共通に以下の項目を整理した。

- ・地形／道：原地形、江戸時代の街路構成、都市計画道路、現在の街路構成を比較し、まちの骨格となる自然地形と街路構成を整理した(図5)。
- ・市街化の変遷：江戸末期、明治42年、大正10年、昭和12年、昭和33年、現在の市街地を重ね合わせ、市街化の変遷を整理した。
- ・土地利用の現状：人口密度、用途地域、容積率、建物用途現況、建物構造現況、建物高さ現況から、都市計画および土地利用の現況を整理した。

2-2 景観単位の抽出

(1) 基本的な考え方

地域の景観は、多様な景観の見方によってテーマづけられた幾重

図5. 地区全体の景観特性の整理：地形／道（例：戸塚地区）

もの景観単位が多層構造を成していると考えられる。そのため、調査においては可能な限り多く、かつ特徴的な景観単位を抽出することが求められた。発見的方法を基礎とし、9名全員が全3地区に跨がり複数の目を通してくまなく現地を見ることで、各人の趣向に偏ることなく網羅的に景観単位を浮かび上げること狙った。

各種調査テーマに基づく景観特性や発見を地図上に整理し、大小様々な景観単位を抽出した。例えば、歴史的市街地における路地景観等では比較的細やかな単位が見出された一方、河川景観や大通り景観等の空間的な広がりを伴うものもあった。また、各景観単位を総合し地区レベルでの比較を行うことで、各地区における景観の構造的な特徴を把握した。

(2) 景観単位の具体例

例えば、高田馬場駅について、「サークル」と「箱庭的駅前空間」の二つの景観単位で記述している。「サークル」では駅前に集う人だまりに着目し、人だまりや大学と駅を行き来する学生が学生街の賑やかな景観を創出していることを示している。一方、「箱庭的駅前空間」では中高層の建築物で囲まれた駅前広場が、屋外広告や建物のボリュームにより一体的な空間として把握されることに着目している。このように、それぞれの調査テーマが独立しているため、同じ場所を対象とした場合でも多様な景観単位が抽出される。

地区別の調査テーマを図6に示す。各調査テーマの名称は、それぞれの特性が顕著に表れるような表現とした。ここでは、「大通り景観」、「路地景観」、「駅前景観」、「自然景観」、「発見景」といった、地区をまたいで共通する基本要素で整理した。

	若松地区	大久保地区	戸塚地区	
大通り	01 ゆらゆらと上り下りする大通り	01 大通りのタテ・ヨコの流れ	01 大通りのうねり	
	02 大通りがつくりだした景観	02 変容する大久保通り	02 神田川の魅力 / 新目白通り	
	03 坂 一台地から降りる一	03 ポケットパーク	03 網目状路地	
	04 商店街 一賑やかな路地一	04 直線的な路地空間と多国籍店の粗密	04 路地と大通りの結節点	
	05 継承される大規模敷地	05 PINK 〜アジアの歓楽街〜	05 階段路地	
	06 細分化する大規模敷地	06 川→都電→路地	06 動線・たまり場・施設	
	07 抜け道		07 高田馬場駅その1 / サークル	
	08 行き止まり		08 高田馬場駅その2 / 箱庭的駅前空間	
	09 地域を際立たせる境界線		09 早稲田駅：あふれ出す歩道	
駅前	10 若松河田駅：過渡景	07 大久保駅 / 新大久保駅：多国籍街の門	10 都電早稲田駅：周辺地域との一体感	
	11 曙橋駅：落ち着いた品格のある景観	08 東新宿駅：都市の中の中継地点	11 下落合駅：まちと解け合う等身大の駅	
	12 若松地区のみどりの現状	09 大久保地区のみどりの現状	12 戸塚地区のみどりの現状	
自然	13 戸山公園とまちのつながり直し	10 みどりの可能性一都市型みどりの景観効果一	13 みどりの可能性一神田川沿道と諏訪通り一	
	14 若松地区の発見的景観	11 大久保地区の発見的景観	14 戸塚地区の発見的景観	
発見景	15 発見景カード その1	12 発見景カード	15 発見景カード	
	16 発見景カード その2			

図6. 担当3地区の調査テーマと結果をまとめた紙面

図7. 本調査で抽出された景観単位の重ね合わせ（例：戸塚地区）

(3) 地区別の景観単位の比較

若松地区では江戸期以来の歴史的な基盤により特徴づけられた景観単位が顕著であった。大久保地区では明治通りを境に東西地域の差異が顕著に現れ、東側では大きな高低差が各地の景観を特徴づけていたのに対し、西側では各地の社会条件が段階的な景観の差異を生み出していた。戸塚地区では早稲田通り沿道を中心とする人の流れによって醸成されていった景観が特徴的であった。

また、例えば「大通り景観」という基本要素で3地区の調査テーマを並べると、若松・大久保・戸塚地区でそれぞれ、「ゆらゆらと上り下りする大通り」「大通りのタテ・ヨコの流れ」「大通りのうねり」となり、3地区における大通りの景観特性の違いが示されていることがわかる。

(4) 景観単位の重ね合わせ

各種調査テーマに基づき抽出された景観単位を地図上に整理し、重ね合わせを行った（図7）。地域の景観は積層する多様な景観単位の総和として表現された。この図は後述の具体的なエリア設定を踏まえた現地調査の際の有用なツールとして活用された。

3 エリア別ガイドラインの策定

エリア別ガイドラインは、2007年4月より計画策定の作業が進められてきた。本稿執筆時においては、2007年10月の新宿区都市計画審議会にて承認された段階である。

3-1 エリアの設定

(1) 基本的な考え方

行政計画としての有用性を勘案し、区の全域において白地や重複地をつくらずに明確なエリア区分がなされた。また、各エリアに固有のエリア名が設定された。当研究室の担当3地区では、最小の景観単位として計21のエリアを設定した。各単位の大きさは大小様々である。エリアの境界については、後に挙げる具体例において示すように、多角的な計画的視点をもって決定した。

(2) エリア分けのフロー

景観基礎調査により抽出された各景観単位により、最小景観単位の見当をつけておくことが前提である。当研究室では、数々の要素を図8に示すようなフローに従ってエリア分けを行っていった。最終的には、その線がエリア境界線として相応しいか否かを詳細な現地調査を以て決定している。

(3) 担当3地区におけるエリア分けの実践

最終決定段階の3地区のエリア区分と各エリア名称を図9に示す。なお、エリア名については、場所をイメージし易い様に各エリアに特徴的な施設や町名等を用いて名称を与えた。

エリア分けについて、具体例を挙げて以下に示す。これらのプロセスがエリアの境界を決定する際の考え方を概ね網羅している。ただし、一つのエリアの境界が唯一の要因によって決定される場合は余り無い。大半のエリアでは、エリア間の境界が図8に挙げた各種要因によって部分的に決定され、それらが繋ぎ合わされることによってそれぞれのエリアが形成された。下記の具体例も、各エリアの境界の一部を決定するにあたり特徴的であった要因である。

・既往計画を踏まえた計画的視点：[4-1]と[5-4]では、既往計画の『「早稲田の森」の提案』³⁾を勘案し、戸山公園一体の敷地に加え、周辺の大規模公共施設の敷地を同エリア内に含むよう考慮した。また、[5-7]では「歌舞伎町ルネサンス推進協議会」⁴⁾の活動を踏まえ、地区を超えて隣接する歌舞伎町一丁目と一体となった景観形成を意図してエリアを設けた。[5-3]は東新宿駅周辺の再開発地区を含んでいるが、新宿文化センターなど周囲と一体となった計画となることを意図してエリアを定めた。[5-5][5-6]の短冊状の路地は歴史的な背景を共有しているが、用途地域の影響等により、大久保通りの南北でそれぞれ商業地、住宅地としての性格が強いため、大久保通りを境に両者を区分した。

・地形と歴史：地形的な要因として、四谷の切れ込み谷地に属する[4-5]や、大久保という地名の由来になった窪地に属する[5-2]では、崖線をエリア境界を定める手がかりとした。また、共に神田川沿いの低地に属する[6-1][6-6]では河川および地区境界によってエリア境界の大半が規定され、特に[6-6]では、[6-5]の高田馬場駅周辺との性格の違いから河川により両者を区分され、いわゆる「飛び地」が設けられた。一方、歴史的な要因としては、旧尾張藩邸下屋敷の置かれていた[4-1]や、大久保通り周辺の百人組鉄砲隊による短冊状の敷地[5-5][5-6][5-8]等において、江戸期の土地利用における敷地境界によってエリア境界の一部を定めた。

・土地利用の現況：[6-6]の高田馬場駅周辺においては、建物現況や周囲との容積率の違い等による建築更新時における差異を勘案し、商業地域としての都市計画の範囲によってエリアの大半が規定された。

図8. エリア分けのフロー

図9. 担当3地区のエリア区分と各エリアの名称

・都市基盤：周囲と歴史的な背景を同様にしていないものの、明治通り沿いの[5-3]や、新目白通り沿いの[6-1]などでは、広域的な幹線道路によって空間的に大きく分断されていることがエリアを区分する決定的な要因を成した。同様に、[5-8]では、短冊状の街区に斜行するJRの線路と小滝橋通りによって分断された特徴的な街区構成となっており、それらの都市基盤によってエリアが規定された。

3-2 エリア別ガイドラインの紙面構成

設定された各エリア毎に、景観特性を図示した上で、それぞれの特色に応じたきめ細やかな景観形成ガイドラインが策定された。これは、既存の行政区画や土地利用等に応じて一律の基準を設けた計画とは異なる考え方である。一方、上述の空間的な広がりに伴う景観のテーマに関しては、都の景観計画や都市マスタープラン等との

図 10. エリア別ガイドラインの紙面構成

緩やかな連携の下、区全体レベルでの景観形成の方針として別途設定された。更に、担当地区では、例えば戸山公園（箱根山地区・大久保地区）周辺のエリア等において、エリアや地区単位を超えた連携を視野に入れた広域的な景観形成を意図した計画を策定した。

本計画書は、主に「地区別トップページ」と「エリア別ページ」の2種類のページによって構成されている。紙面構成とその概要を図10に示す。

4 ガイドブックの編集

本書は、前述の計画案策定時と同様に「新宿区景観まちづくりワーキンググループ」が2007年11月から2008年3月にかけて10地区別に編纂の作業を行い、2008年5月に新宿区より一般に販売されている。ガイドブックの表紙の例を図11に示す。

(1) 基本的な考え方

本書を住民や事業者等による自発的な取り組みの創出に向けたツールとして捉え、各地区に関わる一般の方々を読者に想定し、景観単位の成り立ちや文脈等の理解を助けることに主眼を置いた。

なお、冊子の構成や内容は、基本的に各大学の裁量によるものとされた。ガイドラインと連動して地区やエリアの景観特性を紹介するのみならず、調査中の様々な発見や、各大学独自の提案等も含まれている。

(2) ガイドブックの制作における留意事項

・エリア（最小景観単位）の再統合：エリア別ガイドラインにおいて行政上の実用性を求めて設けられたエリアに準じるよりも、実際に目にみえる景観のまとまりである各種の景観単位に応じて風土や歴史等を解説する方が、事業者や地区住民からの理解を助けると考えた。一方、各地の景観資源や景観の特徴についてはエリア毎に解説されている意義も大きい。「景観基礎調査」より抽出された景観単位を「横串」、『新宿区景観まちづくり計画』のエリア別のガイドラインを「縦串」と考え、両者の関係を踏まえて章立てを行い、後述の「リンク」等において双方を取り結ぶように工夫した（図12）。

・地区住民や事業者と共に考える媒体：読者として想定した地区住民や事業者等は、景観まちづくりの実践者に他ならない。読者とともに景観資源を発見し、景観まちづくりの方法について考えていくため、景観に対する視点を固定化せず、様々な見方を提示することで、読者自身の分析や考察を引き出すことを意図した。表現上の工夫として、各地の景観の成り立ちや景観まちづくりを実践する上での考

図 11 ガイドブック表紙
（例：5 大久保地区）

1章 / 3章	2章			
	エリアA	エリアB	エリアC	エリアX
景観単位 A	○	○	○	○
景観単位 B		○	○	○
景観単位 C	○	○	○	○
景観単位 D	○	○	○	○

図 12 景観単位とエリアの関係

え方や提案等について、対話形式を用いてストーリー立てて解説した点が特徴である。

・既往文献との役割分担の明確化：新宿区では区内の歴史文化資源を紹介した優れた既往文献がある⁵⁾。それらとの差別化を図るため、本書ではフィールドワークを通して得られた景観資源や独自の景観の見方を紹介することに重点を置いた。また、エリア別ガイドラインにおけるエリア別の景観特性の解説では、行政上の必要事項を網羅するため煩雑な表現となっていたが、本書では狭域での景観資源の紹介に重点を置き情報量を調整するとともに、読者の街歩きガイドマップとして活用されることを意図した表現とした。

(3) 『新宿区景観まちづくりガイドブック』の紙面構成

本研究の担当3地区については、「1章 ○○地区の景観をよむ」、「2章 エリア別景観ガイド」、「3章 景観まちづくりを実践しよう」および「コラム」からなる共通の構成とした。紙面構成とその概要を図13に示す。

1章では景観単位別に、2章ではエリア別に景観を解説しているが、相互に関連する景観資源については、1章の紙面中に「リンク」を伏すことで対応関係を明示した。3章では、エリア別ガイドラインにおいてエリア別に示されていた景観まちづくりの方法を、景観のテーマ毎に再構成して解説した。

5 まとめと今後の課題

本稿では、早稲田大学後藤研究室による新宿区を対象とした一連の景観まちづくりの取り組みについて、それぞれの手法と考え方を示した。「景観基礎調査」において基本的な街の成り立ちを整理する

図 13 ガイドブック担当 3 地区の紙面構成

とともに詳細なフィールドワークを実施し 1) 景観特性の把握、をした上で、2) 景観単位の抽出、を行い、地区別の景観単位の比較や景観単位の重ね合わせなどにより各地区の景観の構造的な特徴を把握する手法を示した (2 章)。エリア別ガイドラインの策定に向けた 3) エリア設定、をエリア分けのフローと具体例をもって示し、4) エリア別ガイドラインの策定、における計画書の基本的な構成を概説した (3 章)。ガイドブック担当 3 地区 (若松・大久保・戸塚地区) における 5) ガイドブックの編纂、については、地区住民や事業者等の一般的な読者を対象とした本書の位置づけを述べた上で、対話形式など表現上の工夫点や冊子の構成を概説した (4 章)。

以上を総合して、既成市街地における景観単位を尊重した景観まちづくりを行う上で、従来に比して極めて小規模な計画単位を区の全域に渡って決定し、その実践に向けた官民双方からのアプローチ、すなわちコントロールとマネジメントの双方を相互補完的に展開していくための計画技術を示した。

今後の課題として、エリア別ガイドラインについては、施行後の運用面や内容面における改訂、改善の必要性が挙げられる。開発事前協議における景観指導のツールとしての実効性の向上とともに、協議プロセスの透明性の向上等も求められるであろう。また、住民や事業者等への本計画の更なる浸透と、自発的な取り組みの創出に向けた継続的な取り組みが重要である。地区協議会等の場を活用するとともに、ガイドブックが実際の議論の場における有用なツールとなることが期待される。

【謝辞】

新宿区景観まちづくり計画・ガイドブックの策定にあたり、新宿区景観まちづくりワーキンググループ、新宿区景観小委員会並びに景観審議会、そして、新宿区地区計画課の皆様には大変お世話になりました。特に、高松美香氏には

10 地区・3 研究室の調整役という大変な役目をしていただいた他、様々なサポートを頂きました。ここに記して感謝します。

【補注】

- 1) 全国各地の景観まちづくりに関わるガイドライン策定等の取り組みは、文獻 8 などに紹介されている。
- 2) 本計画の枠組みに関しては文獻 3 に詳しい。新宿区は景観行政団体として、2009 年度の施行を目標に本計画の策定を進めている。新宿区と事業者間で行われてきた開発事前協議は 16 年の実績があり、個々の建築物単位では効果を挙げた。しかし、これまでは指導の根拠とならず、景観アドバイザー個人の判断に委ねられていたのが実情であり、各地域の特性に応じた景観形成の方針を示すことが重要な課題であった。
- 3) 西早稲田・戸山・大久保に分布する早稲田大学キャンパスの周辺エリアには、戸山公園を中心に比較的大規模な緑地環境を有している。また、様々な研究教育機関や医療福祉機関が集積している。このような地域資源を活用していくことで、大規模敷地と公園の緑が一体となった「都市の森」の創出や、大学と周辺地域とが文化・教育・医療といった様々な分野で高次に連携しながら共生していく大学都市の創造が期待される。文獻 5 参照。
- 4) 2005 年より、新宿区や地元商店街等の共同による「歌舞伎町ルネッサンス推進協議会」が発足し、様々な環境浄化・地域振興対策が行われている。特に、「まちづくりプロジェクト」においては景観形成の指針等も含まれている。
- 5) 例えば、文獻 6、7 など。

【参考文献】

1. 新宿区、『新宿区景観まちづくり計画 (素案)』、2007
2. 新宿区景観まちづくりワーキンググループ、『新宿区景観まちづくりガイドブック』、新宿区、2008
3. 中島伸、永瀬節治、中島直人、野原卓：新宿区景観基本計画策定に向けた景観基礎調査の枠組み—一般的な市街地を対象とした景観調査手法に関する実践的研究 その 1、2007 年度日本建築学会学術講演梗概集 F-1 pp121-122
4. 永瀬節治、中島伸、中島直人、野原卓：新宿区における景観構造図の作成を通じたエリア別景観特性の抽出—一般的な市街地の景観調査手法に関する実践的研究 その 2、2007 年度日本建築学会学術講演梗概集 F-1 pp123-124
5. 新宿地域・活力ある緑の大学都市づくり研究会、『「早稲田の森」の提案』、2006
6. 新宿区、『新宿文化絵図 - 重ね地図付き新宿まち歩きガイド』、2007
7. 新宿区、『新宿区時物語 - 新宿区 60 年史』、2007
8. 日本建築学会編、『景観法と景観まちづくり』、学芸出版社、2005

[2008 年 6 月 20 日原稿受理 2008 年 8 月 4 日採用決定]